

京大現代文頻出 テーマ「言語と文章」のレジュメ

作成者 中野 芳樹

京大では、言語、哲学・思想、歴史、文化・民俗、美術・芸術、文学など、**人文学分野からの出題が基本**であり、政治経済分野（社会科学）や自然科学分野からの出題は、ほぼ皆無と言ってよい。なかでも、**言語（話し言葉と書き言葉、日常語と文学的表現等）、文章（実用的と文学的、現代的と古典的等）、書物（読むこと・書くこと）を巡る内容の文章**が出題されやすい。他方、**人生哲学・人生論的内容の文章**も出題頻度が高く、これらは決して内容の浅い趣味的な文章などではなく、人文学の極めて深い学識のある出題者によるものであり、現代文の学力の一要素として、京大国語はある程度の人文学的素養を前提としていると考えられる。**軽いタッチの随想を読んで、そこに深い思索に基づく学術的知見を掬い取る**ような理解が求められている。人間と社会、自己と他者について、良書をよく読み、よく考え、よく表すことが、根本的な学習目標となるであろう。

以下は、京都大学の本試験出題内容に鑑み、（通常授業や講習においても解説は行っているが）ある程度の出題内容のパターン分類を試みたレジュメである。

【1】 言語・言葉に関する様々な議論の概要

A そもそも「言語」とは何か

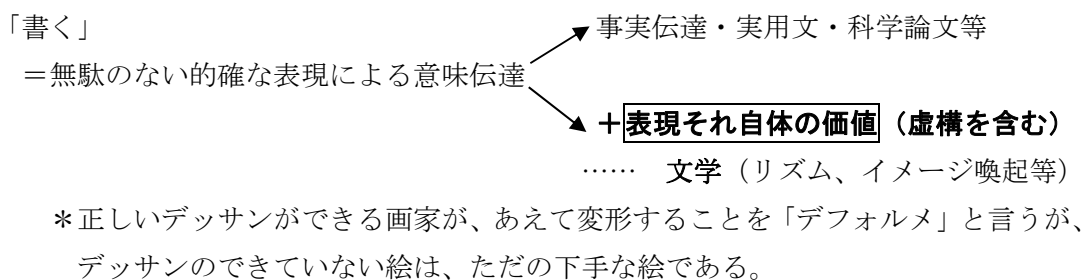
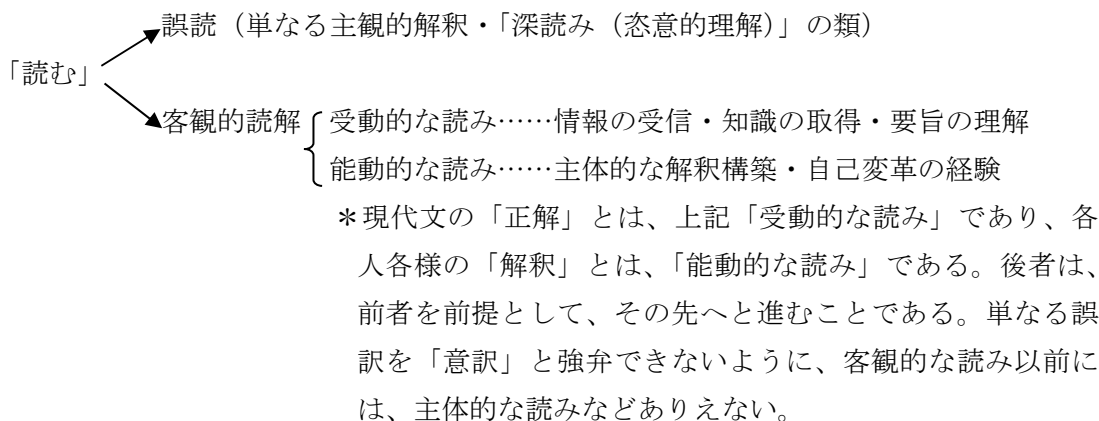
- ① いまだ言葉にならない精神のあり方＝前言語的様態
 - ・無意識、image の段階 → 夢・美術・音楽等、言葉以外の^{イメージ}形象による「表現」
 - ↓
- ② 言葉になる段階＝認識・判断・思考における言語
 - ・意識、世界を自然言語で分節・差異化して認識する（概念化・抽象的な分類）
 - *言葉・記号による世界の分節・認識・概念化は、文化的差異と相関する

B 話し言葉と書き言葉との違い

- ① 話し言葉＝口語 spoken（言語の始まり、日常的表現）
 - …… 語用・対話の現場（特定の相手と向き合っている言語使用）
 - 即興・粗削り、未完成、リアルタイム
 - ↑
 - ↓
- ② 書き言葉・文語 written（文化・歴史・文明の始まり、日常的表現と文学的表現）
 - …… 読者（不特定多数、広域、匿名性）、推敲・洗練、完成、オンデマンド
 - *言語の歴史的変容（文法・語義・用法等） 社会変動と言語変容の相関

[2] 「読む」ことと「書く」こと、日常的表現と文学的表現について

* 「読めれば解ける」(本文内容を正しく解釈できれば、それだけで入試問題の設問に解答できる) という意味のことを言う国語指導者が少なからずおられるが、他者による言語表現について、日常実用的伝達程度の語用でもあるまいに、まず「自分は読めている」と無謬性を前提できるとは、あまりにも素朴な自信のありようであろう。「翻訳は原理的に不可能である」とは、よく語られるところであるが、そして私も何の異論もないが、それは何も母語に対する異言語に限ったことではあるまい。先入見、偏見、文化的制約、様々な個人差等々、誤読(といては気に入らなければ、不可避のバイアスによる解釈の偏向)こそが「分かる」ことの内実ではないのか。それくらいは「読む」という作業とそれにとまなう精神作用には慎重でありたい。



〈文学・芸術の理念的対立〉

* 「現実」をありのままに描写(リアリズム)……現実(人情と世態風俗)の客観描写
(自然主義や私小説 ← 芸術か?)
↑
↓
「理念・普遍性・創造性」(理想主義)……虚構を用い、単なる事実・現実ではない、
真実・理想を追求
* 理想主義は単なる想像やフィクションの礼賛とは異なる